

## そそのかした男

木坂広一

離婚して以来、好きになった女はいない。いつだって単発で終わってしまう。高山安夫はこのまま一人暮らしをするのは耐え難いので、何とかしてまた女と過ごしたいと思っている。だが毎日何事もなく過ぎていく。ちょっととした出会いもなかった。退屈のあまりどうでもいい、つまらないことはかり考える。たとえば、滝川区立図書館に勤めていたころのことだ。あのころ、村中公夫とはよく付き合った。彼は温厚だが時々短気を起こすことがあった。小川佐代子も印象的で、彼女は針の先でチクチク刺すようなことを言うので到底好意が持てなかった。中学で国語の教師をしていたから頭は人並みにいいかもしれない。性格を前面に出してものを言うからか利口そうに見えた。村中は小川の頭脳を買っていて、

「思考能力の冴えた女性だね」いやに感心するのだ。

「それほどでもないよ」高山はその度に否定した。

「高山さんよりは上だね」

「比較して、ものを言うなよ」

高山はいい気はしない。しかし彼女はパワーがあつてどんなことにも精神的に立ち向かった。ウクレレを習い、詩集の自費出版を企画したり友達と食べ歩きしたり——佐代子にないものはボーイフレンドだった。同僚たちは、東北から上京したのは恋人を見つけたためだろうと噂した。恋人と言えば、村中もいなかった。村中も佐代子も同年の二十八である。年下の高山は同棲中で四年間が過ぎるのでダレていた。いつそのこと別れて、新たに開拓しようかと考えている。あるとき、村中と異性の話をしていた。

「俺は容姿よりも、性格が第一だね」高山が言った。

「俺は何といつても、美人でなきや、納得しないよ」村中が主張した。

そばで聞いていた佐代子が、

「あなたたち、口だけじゃ駄目よ。実行しなきや」

憤慨したように口をはさんだ。自分が疎外されると思っているらしい。

「ああ、いい女を見つけるよ」

「小川さんね」

高山は小川を見て笑った。佐代子は気の毒だが美人とはほど遠い。黒斑の眼鏡をかけ、鼻梁は太く、ひつめ髪、とりわけ大柄な顔をしている。福助にも女史タイプにも見える。饒舌でよく笑ひ、明朗闊達だった。

三人はちよつと白けて仕事を始めた。滝川図書館は新設して間もない。蔵書が少ないので資料をもとに新しい本を購入するのが主な仕事だった。S区は東京都の北部にあり、細長い地帯である。図書館の近くに有名な庭園があり、よく休みにいった。裏通りの民家の庭には花がたくさん見られた。白モクレン、コブシ、ミモザ、ジャノメエリカ、アンズなど、今も記憶に残っている。

この三人は馬が合うわけではない。高山は小川佐代子が明快そうなロジックで喋るのが気に入らない。空虚感が隙間風のように吹いてくる。しかも村中が褒めるので余計に鬱陶しい。五月のゴールデンウィークに入る前、彼らはF庭園に出かけ、カフェで紅茶を飲んだ。会話ははずまない。村中は話すのが上手とは言えず、口ごもりがちである。高山は得意ではない話題には乗れなかった。沈黙が流れたあと佐代子が、

「麻布で叔母様が、瀟洒な喫茶店をやっているの。私、

そこでお手伝いをしようかしら」

キザな言い方に寒気がした。それにこれほど不似合いなウエートレスはいないだろう。

「いいじゃないかな」村中が何の気もなしに言う。

「客が来なくなるよ」高山が冷やかす。

「私、案外、若い男の子に受けがいいのよ」

小川は照れもせず本気である。そんな話から会話の糸口がつかめた。

「村中さんは、恋人、いらつしやるの」

「いや、いないけど」

「素敵だから、いてもおかしくないわね」

「ぼくは三十歳までには結婚したいね。だから、それまでに見つけるよ」

「私も大体同じね」

「俺はまず古いのを片付けなきゃな」

「高山さん、そんな女めいたの」

小川佐代子が洪水のような勢いで笑った。

「君は、何かにつけて、俺を過小評価しているな」

「だって、いるようには見えないもの」

「俺はファイティング・スピリットがあるからモテるんだ」

「低レベルの女性ばかりじゃないの」

佐代子の得意の毒針である。こいつめ、高山は不快な気分になった。それで、

「小川さんは、どうなんだい。可能性はあるのかい」  
あえて聞いてみた。

「さしあたり、教え子と会うつもりよ。彼、イケメンなの。東京に住んでいるんだけど」

「付き合ってくれそうかね」

「多分ね」

佐代子はすましている。分別のある女ならこんなこととはしない。己の限界を心得ているはずだ。しかし彼女は自分は輝いていると信じているから女は恐ろしい。

「早く詩集を出して、彼に謹呈したいわ」

「僕も読ませてほしい」

「もちろん、村中さんにも差し上げるわ」

高山は黙っていた。小川も無視している。小川なんかに詩人の才能があるものか——高山は侮っている。

夏が終わり、暑い九月も過ぎて十月の初旬、本館が改築することになり、職員が二手に別れて、滝川にもやって来る。館長も次席も来て賑やかになった。用務主事の坂井勇二はちよこちよ動き回って有力者に媚びへつらっている。こういうことがよく似合う男だ。やり手の小川佐代子も活気づいてきた。

高山はそのころから村中と繁華街に出歩くようになって、彼のことを深く知った。千葉県の銚子の生まれで、幼いころ、両親と死別して養子として育てられた。

地元の高校を出て明治大学の二部に入り、民間企業で働きながら卒業した。親の愛情が不足しているのか、未成熟なところがあった。セックスが苦手なのと無関係ではないだろう。S区役所に入ると非正規から正規になって、念願の図書館勤務になった。市民社会の一員になったという自負心を抱いたのか、俺、僕という第一人称が私に変わり、どの場面でも私で通すようになった。その一方で自分は精神的に駄目になったと打ち明けた。どう駄目になったのか、見た目には理解できない。ただ女を見る目は幼くて外面だけを重んじた。あるとき、高山がこうからかった。

「村中くんは、デパートのマネキン人形を見ると、こ  
の子、可愛いから結婚したいよ、と言いかねないね」

「アハハハ。そんなことはないさ」

「あんたは、美形好みなんだ」

「それは言えているね」

高山も村中も女が嫌いなはずはなかった。ただし二人のアプローチの仕方は異なっている。高山はセックスまで進まないし収まらないが村中はそこまではいか

ない。お互いに主張が強いのか、歩調が合わずもめたことが何度もある。

あるとき二人は行きつけのバーのホステスたちを村中のアパートに招いた。村中は田端の木造家屋の二階に住んでいた。昼間から酒を飲み、いい気分酔った。窓から城のような積乱雲が浮かんでいるのが見えた。機は熟し、二組に別れて行為に及んだ。高山が抱擁していると村中達は壁にもたれて女の手相を見てやっている。

「おい、何をやっているんだ。早く始めろよ」高山が急かせた。

「我々は、これでいいよ」

「愛撫してあげろ」

「あなた、放っておきなさいよ」

高山の相手が苛立ち気味だ。衣服を脱がせて二分ほどすると、高山は村中にいきなり両足をつかまれて引きずられた。プロレスの技のように。彼はカッとなって立ち上がった。

「肝心なときに、何をしやがる」

村中は無気力なニタニタ笑いを浮かべた。

「私は、そんなことに興味ないよ」

「不能だろう」

「そうじゃない」

「そうだとしたら、致命的だぞ」

「人並みにできるよ」

「嘘だ」

「高山くん、冷静になってよ」

「くそッ、せっかくのチャンスを逃がしたぞ」

二人が言い合っていると、バカみたいと女達は無視して帰ってしまった。

窓の外の青空はいつの間にか曇っていた。冷たい風さえ吹いてきた。高山はふくれっ面をして辞去した。

彼らは三日ほどものを言わなかった。村中が最初に口を開いた。女遊びをしたかったら私と組んでも駄目だよと。確かにその通りだが高山は黙って聞いていた。しかし彼との付き合いは途絶えることなく続いた。

年が明けてひととき寒い日が続いた。小川佐代子は二十九歳になり、誕生日を嘆いた。そればかりか教え子とは多忙だとかで会えなかった。詩の評判もよくない。おまけに叔母の経営する喫茶店も閉店になった。このところいいことは一つもない。

勤めの帰り、高山は上中里駅のプラットホームにいた佐代子に声をかけた。彼女は寒さで鼻の頭を赤くしていた。二人は暖房のきいた待合室に入って座った。

「村中君が、君の詩を褒めていたよ」

「嬉しいわ」

「彼ったら、小川さんには、何かにつけて優しいな」

「あら、そうなの」

「さかんに、頭がいいと、絶賛するしね」

「頭はよくないわ」

「小柄だけど、均整がとれていて、顔立ちも整っているとか……」

「まあ、お上手ね」

村中はそれらのことを一言反句も口にしたことはない。整っているといっても福助顔で足は大根に近く、表面はザラザラした鮫肌だ。さらにエスカレートした。

「見ている人は見ているさ」

「私、前から村中さんって、好きよ」

「こつちが好きってことは、向こうも好きなんだよ」

「お互いに通じ合うものよね」

「そうなんだ」

「あなた、男女のこと、よく知っているわね」

「それほどでもないよ」

「あなたの愛していた女性は、どうなったの」

「ああ、別れた。寂しいもんだね」

それは本音だった。四年間も一緒にいると、土に根

づいて簡単に抜け出せないものだ。

「高山さんって、悪い人でしよう」

「いや、我々はよく話し合って別れた」

「それなら、いいわ」

「相手の女は、小憎らしいことを言ったよ。お母さんにいい女むすめを見つけてもらいなさいとね」

「まあ、子供扱いね」

「優位に立っているつもりだろう」

「高山さんって、どことなく幼児性があるものね」

「そうかなあ」高山は話題を元に戻した。「それよりも村中は、小川さんに強い関心を持っているよ」

「それなら、彼、はっきり言えばいいのに」

「口にできないのが、彼の性格なんだ」

「気が弱いのかしら」

「いや、女を知らな過ぎるんだ」

「そういう感じがするわね」

「小川さんがリードするしかないよ」

「私、自信があるわ」

「頼もしいね」

話しているうちに、こんな具合になった。村中はおとなしいわけではないが内側から滲み出る活力がない。特に女性関係になると異様なくらいに緊張してし

まう。相手が小川佐代子なら、美人ではないから気が楽だろう。一週間、十日が過ぎると雲行きがちがってきた。まさか高山がそそのかしているとは思っていないだろう。

「彼女、私に凄く親切だよ」村中が言った。

「それは、いいことだ」

「かまってもらうのは、悪い気持ちじゃない」

「分かるねえ」

彼は母親の愛情が希薄だったから大人になった今でも揺り籠に入っているような気分を求めている。佐代子のそれは、母とも異性ともつかぬ不思議な温もりだった。彼女に誘われればいつでも付き合った。そのうち、

「あなたの家で音楽を聴きたいな」

佐代子が申し出た。いいよ、村中は素直に答えた。

それ以来、田端のアパートにひんばんに訪ねてくるようになった。その度にビールやウイスキー、おつまみや寿司を紙袋に入れて持参した。CDでは主にクラシックをかけた。ダンスも踊った。体をピタリくつつけられても村中はキスをするとか、愛撫するとかはしなかった。常に紳士的に振る舞った。いくら堅物でも欲望はあるはずだが、彼は手を出さない。深入りする

と大変なことになるからだ。むろん佐代子は一線を越えることを期待していた。村中はそんな考えは更々になく、胸の中は氷のように冷やかだった。佐代子にしたら、いまだかつてこれほどまでに自分を受け入れてくれた男性はいない。幸福感でいっぱいだった。佐代子は踊りながら村中に囁いた。

「そろそろ、何か言つてください」

「何かって」

「愛しているとか」

「いや私は、そんなことは言えないよ」

「恥ずかしがらなくてもいいのに」

「そうじゃない」

「ほら、私は唇を差し出しているのよ。お願い。私の口もとに重ねて」

「何をしているのかと思った」

「女の気持ちを分かかって」

「悪いけど、その気になれないね」

「困ったわね。学習するチャンスなのに」

「離れてよ」

「いやよ」

——高山は、村中の話に熱心に耳を傾けた。どんな質問にも素直に答えてくれるので感心した。そして《実

らぬ恋』の、あまりにもチグハグな成り行きに飽きることがなかった。佐代子は度々訪ねてきた。村中はついに音を上げ、迷惑に感じた。

「来ないでほしい」

彼は断った。ある日の昼休み、豊田という中年の女子職員に喫茶店に呼び出された。佐代子に頼まれたという。そして彼女の愛を受け入れなさいと豊田が圧力をかけてきた。

「また、がさつな女が現れたもんだね」高山は眉をひそめた。

「そうだよ。あんな女に、打ち明けることはないのに」

村中は渋い顔。

「小川さんは、よっぽど盲目になっているんだな」

「うん、変なくらいだよ」

「しかし、豊田だつて変な女だね」

悪口になった。彼女は十八のとき結婚して、二十年間連れ添った夫と離婚した。長年仮面夫婦だったが、仲睦まじい夫婦のように見せて、同僚達を煙に巻いていた。後からどれもこれも嘘で興ざめだった。豊田の人格は信頼に値するものではない。元夫はその後不治の病を患い、入院して苦しんだ末に死亡した。その間一度も見舞いに行くことなく、葬儀にも参列しなかつ

た。

『小川さんは、何でもできるのよ。あんな女性は滅多にいないわよ。素晴らしいじゃないの』

豊田はほめ讃えた。村中には何を聞いても真実味が感じられなかった。

「豊田まで巻き込むとはねえ」村中は愛想をつかした。

「それで、どうした」高山が聞いた。

「きつぱり、はねつけた」

「そうしたら」

「重ねて、小川さんとの結婚をお勧めしますとね。し

つこかったなあ」

「豊田も自分に嘘をついているんだよな」

「そうに決まっている」

村中が最後に言った。二人の愛は当然のように実ることはなかった。村中は疲れ、小川佐代子は残念がつていた。

臨時職員の人員整理があつて高山と小川は正規に昇格することなく、辞めさせられた。佐代子はチラと涙を見せた。高山は何とも思わなかった。本館の連中は合わないのでかえってよかった。三ヶ月ほどしてハウツー物の本を出している出版社に契約社員として入

社した。編集の仕事に慣れたころ、小川が自宅に電話をかけてよこし、郷里の児童図書館に勤めると報告した。迅速に見つけて希望の仕事に採用されたのは小川らしい。

「私、向こうへいったら、童話を書くわ」

佐代子は夢を語った。前にも宮沢賢治を愛読していると話していた。高山は幼稚な女の賢治ファンは尊敬できない。

「君は、書くのは似合わないね」

「そんなこと、ないわ」佐代子は不満そうだ。

「創造よりも現実的に処理する能力に長けているよ。神経も凶太いしさ」

「凶太いとは何よ。失礼ね」

「敵に針で刺すこともできる。それは強力な武器だ」

「以前にも言われたけど、私、そんなことしていないわ」

「無意識にやっているんだ」

「全然、気がつかないわ」

コンプレックスの裏返しだ。子供のころ、何かあったんだろう。彼女は誰かに子供のとき、重い病気をしたと話していた。そのせいに違いはない。佐代子はほんの少し背中が突き出ている。大抵の人はそんなもの

に気がつかない。本人は気にしているだろう。

「無意識は罪だよ」

「親にも言われたことないわ」

「だから、ここで自己省察してみるんだな」

「さしでがましいわね」

「ところで、用務主事の坂井さんが君のこと、褒めていたぞ。小川さんなら、結婚をしてもいいとね」

「坂井さんだって！」

「そうだ」

「ふざけるのもいい加減にしてよ」

「念のために、彼に聞いてみただけだ」

「あんな品性の低い中年に、わざわざ聞くわけ」

「小川さんには、好意的だったからさ」

「あんな奴は大嫌いなよ」

「僕だって、嫌いだ」

「もう、けっこう」

それで電話は切れた。村中の話は一切出なかった。テレビをつけていつも観る番組のチャンネルを回した。

一時間ほど見てコーヒーを飲みながら、

「村中はいつだって、女に疎いなあ」

高山は思い出して憎々しげに呟いた。高山はよく過去に対して不平や忿懣でモヤモヤした。銀座のスナツ



クで知り合った二人組のうち村中はひかりという女に目を奪われた。こんなのを一目惚れとは言わないだろう。会ったばかりなのに結婚すると言い出し、そう思うとそのことしかなく、何が何でもという心境になっていた。

「安易だね」高山は非難した。

「向こうもその気なんだ」

「これは遊びにしたほうがいいよ」

「彼女は、遊びはいやだと言うんだ」

ひかりはごく普通のOLである。整っているが美人というほどではない。村中より一つ下でやや老けて見えた。顔に性格が表れているのか、きつい感じがした。しかし村中にしたら美人の域に達しているのだろう。客観的に見たらどこがいいのか理解しがたい。標準だが平凡な女に過ぎない。村中の美的感覚は高いとは言えないのだ。

「ひかりさんは、村中君の心に訴えてくるものがあるのかね」

「あると思うね」

「俺は、そうは見えなかった」

「これから付き合っていけば、見出せると思う」

「曖昧だね」

どうあれ、放っておくしかない。三、四日して田端のアパートに女性二人を招待して四人で飲むことにした。簡単な料理と酒を用意して待っていた。

村中は妙に畏まっている。リラックスするため軽くウイスキーを飲んだ。そのうち急ピッチで口に運ぶのでどうしたのかと思った。時間通り客が現れたがひかり一人である。あとの一人は用事があって来られないそうだ。テーブルを囲んでビールで乾杯した。ところが、村中が嘔吐を催して吐きそうになった。玄関のたたきに移動して、ゲージャーやった。見るに耐えない光景である。ひかりはいやがりもしないで背中をさすり、タオルで村中の口を拭ってやった。そして汚物を新聞紙で包んできれいに片付けた。それらは自分でやるべき義務だと使命感さえ抱いていた。終わるとひかりは挨拶して帰っていく。宴は打ち切りになった。

「私は結婚するよ。気持ちしが固まった」村中が強い口調で呟いた。

「こんな汚いものを片付けるなんて、偉いね」

「汚いものと言ったって・・・」

「俺には、到底できないよ」

高山も吐きたい気分になった。

「いちいち、言わなくともいいよ」

「生理的にいやなんだ」

「うるさいな」

二人の愛情は深まり、デートを重ね、兄夫婦に紹介し、友人にも引き合わせた。また式の段取りもつけ、仲人は館長夫妻に依頼した。挙式を無事にすまずと新たに借りたマンションで新婚生活を始めた。帆船は初々しく出港したように見えたが、しかし内情は波乱含みのようである。村中は眉間に苦渋の皺を寄せて逐一報告した。

「ひかりが言うんだ、あなたは、もっと品性の高い友人を持ちなさいとね」

「俺のことなら、降りてもいいぞ」

「気にしないでよ」

「でも、何のことだ」

「最初に会った日、妻の友人の体を触ったろう」

「酔っていたから、覚えていない」

「それに、贈物のアルバムなんて、ちやちだと言うんだ」

「あれは英国製のいい製品だよ」

「せめて、一万円くらい包むべきだとね」

高山は迷いに迷って選んだ。それを新妻にけなされるなんて屈辱だった。お金にすればよかったかな、今

更言っても仕方がない。

「うまくいっていないみたいだな」

「ああ、トラブル続きだ」

「やっぱり、気の強い性格だね」

「うん、強烈に自己主張するからな」

やがて夫婦関係は完全に崩壊した。原因は典型的な性格の不一致である。ひかりが離婚を切り出したとき村中は苦り切った顔つきになった。わずか二カ月半しか経っていない。彼は世間の笑い者になりたくないと思った。何を言われるか分かったものではない。今、別れるわけにはいかない。切羽つまって言った。

「私は君が好きだ。愛している」

ひかりは相手にしなかった。彼は食い下がった。

「考え直してよ。お願いだ」

「私には、愛なんか、からきしないわ」

「私には、ある」

「嘘よ。嘘に決まっているわ」

「嘘じゃない」

「世間体だけよ」

「世間体は大事だ」

「あなたには、それしかないのよ」

そんなやりとりを延々と繰り返した。いつかは翻意

してくれるだろうと思つて。頼りにならない兄貴も動員した。高山も頼まれたが彼は返事だけして黙つていた。村中はいつまでも諦められなかった。

「愛していないのに、愛していると言うのは詐欺だ」  
高山は非難した。

「改めて、好きになつたんだ」

「自分にまで嘘をつくのは、よせよ」

「私は必死なんだ」

「おかしいよ」

村中は真面目になるほどに血の通わない人形に見えた。とうとう不本意な形で決着がついた。ある日、勤め先から帰宅すると室内はガランとしていた。妻は肉親に手伝ってもらつて家を出てしまった。それでも戻つてきてくれと何度も電話をした。気持ちを整理するまで長い時間がかつた。

村中はボデイビルにはまつた。気をそらすためである。月日が経ち、猫背気味の背筋もシャンとして胸板が厚くなつた。体力や体型に自信を持つようになった。もともとナルシストの要素があるから自分に酔うことができた。高山はそういう村中を気持ち悪いと思つた。さらにエスカレーターしてマラソンに凝るようになった。代々木体育館に定期的に通い、走ることに熱中した。

彼は知的なものを吸収することはないので頭の中は空っぽだったが、自分は中身は濃い人間だとよく言つた。本当にそう思つているのだろう。そして、

「女は股を広げられても、お断わりだ」  
を繰り返した。

三十二になる高山は結婚する気にはなれなかった。

彼は子供のころ、女が怖かつた。母方の親戚の文子が優しそつたので、小学校の低学年のころ叔父に、

「大人になつたら、文子と結婚できる？」聞いてみた。

「文子は血がつながっているから、できないね」

文子は年下の叔母である。叔父は笑わないで教えてくれたので嬉しかつた。中学のとき、意地悪そうな叔母が、

「あんた、年頃になつたら、結婚しなさいよ」諭すように言つた。

「僕は、独身主義だから、しないよ」

「だめよ。私らが恥ずかしい思いをするんだから」

「僕はもう決めているよ」

本当にそのつもりだつた。成人に達しても結婚願望はなかつた。だが人から何か言われるといやな気持ちになつた。出版社の先輩の渡部が、

「高山君は何故、身を固めないのかね」

同僚に尋ねた。それを聞かされたときは動揺して気持ちが高ぶった。同時に干渉しがちな渡部を憎んだ。

「どうして、人のことに口を出すんだらう」

「自分が、いい思いをしたからじゃないかな」

「逆シンデラか。いい気なもんだ」

「得意なんだろう」

渡部は愛知県農家の出なのか、自分の階級に引け目を感じていた。所帯じみた小男で見栄えがしない。

どう見たって釣り合いが取れないが、最終的には三拝九拝して相手の了解を得た。社内では矮小化して語られがちなので高山も耳にしたことがある。

「俺、渡部が好きじゃないんだ。口先だけ、きれいごとを言っただけ、腹の中は真っ黒だから」高山は陰口を叩いた。

「よっぽど嫌いだね」

「ああ、大嫌いだ」

後年、大宮市の自宅を改造してばかりか、家建てた。貯金と妻の家から援助してもらって資金をつくった。同僚は大宮御殿と呼んで身分不相応な家を揶揄した。高山は家の大きさなど何の関心もないので冷笑を浮かべていた。

高山は三十五歳のとき、美術出版社に勤めていた七見と結婚した。性格がよく清潔感を感じさせた。相思相愛になったが、母親と弟と妹とは気が合いそうになかった。母は尊大で大学生の弟は小馬鹿にしたような口の聞き方をした。初対面から不愉快きわまりない気分させられた。

「あの人たちと一緒に暮らすわけじゃないから」婚約者はなだめた。七見とならうまくいきそうだった。しかし思惑通りにはいかななくて九年後には破局を迎えた。ありふれた理由だが女のことだ。

池袋の街を女と歩いていたら七見の弟と妹に見られた。妹の夫が池袋で商売をしていて、そこへ弟が用があつて訪ねていった。その帰り、駅まで妹が送っていて途中のことだったが、高山は二人にまったく気がついていない。後から妻に連絡が来た。

「腕を組んで歩いていた。相手の女は、全然美人じゃないわ」

妹が姉に告げた。弟も、

「あいつが、女にもてるとは思わなかった」

余計なことまで口にした。

「安夫に限って、そんなことないわ」

妻は必死になって打ち消した。本当にあり得ないこ

とだと思つた。だが妹弟の話したことは事実だった。

高山は執拗に質<sup>た</sup>され、最後にはしづぶ認めた。高山は当時出版社を退社して、フリーのライターになり、金も自由に使えた。相手の女は五歳年上で四十八になり、週に三日美容師として働いていた。美人ではないがタイプの顔立ちをしている。大柄でスポーツをやっているような体つきをしていた。現に高校時代は陸上の選手だった。初恋の女も同棲相手も彼女に似ていた。高山は美貌よりもそこに奇麗な女にひかれる傾向があつた。向こうも彼に惚れ込んで配偶者と別れて結婚してもいいとまで言つた。だが実行には至らなかつた。妻には平謝りに謝つて許しを請うた。温厚な性格だが夫の過失には甘くなかつた。郷里の松本市の義母の耳にも入り、電話をかけてよこしてガラガラした口調で安夫を攻め立てた。あんたは七見にはふさわしくない、七見とは比較にならない、最初に見たとき、何と知性のない男かと怒鳴つてやりたいくらいだったとまくしたてた。

「私だつて、頭に来ているよ。あなたは年寄りには偉いと勘違いしているだけだ。実際は陳腐な考えしかない。年寄りがどうしたというんだ。国だつて、いらないと考えているのに」

「誰がそんなこと言っているの」

「本音はそうなんだ。口に出さないだけで」

「無責任なことを言うんじゃないよ」

「あんたは特にいないほうがいいんだ」

「いらぬのは、お前さんだよ」

「うるさい、黙れ！」

「ちが明かなかつた。結局離婚することになって、妻は一人息子を連れて郷里に帰つた。義母は夫と死別して一人身だから喜んで受け入れた。高山は四十四歳になり、年金が支給されるまでライター稼業を続け、小説もどきを書き、何冊分ものゴースト・ライターもやつた。仕事を辞めると気分一新のため、東陽町の老朽マンションの四階に移り住んだ。古いが居心地がよかつた。六畳の部屋の畳が一枚だけ新しいのが気になつていた。その日、暇つぶしにめくつてみた。すると板敷きに血痕が二、三カ所ついていたので、一瞬ぞつとした。高山はやつぱりそうかと思つた。ここで殺人事件があつたのだろう。ただちに駅前不動産屋にいつて事務員に談判した。

「事故物件じゃないですか」

「調べてみます」

事務員は書類を見て上司と相談して家賃を値引きし

てくれた。一万二千円安くなったので相当得した。むろん上司が謝罪したので不満はなかった。彼は二年前の人殺しなど気にしないほうだった。

高山が所帯を持って一年くらいしたころ、村中が話したいことがあると言うので、新宿のカフェで会った。十月の中旬だった。あいかわらず身だしなみがいい。ブルーグレーのスーツが似合っていて顔色も悪くない。おたがいの健康を讃えてから村中が切り出した。

「実は再婚することになってね」

「ほう、それはいい話だね」  
興味ありげに答えた。

「沢木さんに、紹介されたんだけど、いい感じの女性なんだ」

「沢木さんなら、手堅いね」

沢木というのは彼のマラソン仲間の一人である。高山も二、三度に一緒に飲んだことがあって、親しい間柄になった。村中も女性も再婚同士で三歳年下である。叔父のやっている建築事務所で経理の仕事をしている。性格のいい地味な美人だとかでよさそうな感じがした。前の夫はギャンブル依存症で月々の水道代、ガス代にも事欠くほどだった。三年間辛抱したが耐えられなく

なって別れることにした。その点、村中は公務員だから経済的に安定しており、縮まり屋だし、文句のない男である。

「お似合いのカップルだね」

「自分でも、そう思うよ」

「家庭的な女性みたいだし」

「そうなんだよ」

抑制した口調で言う。それから彼は独身寮に十年間も住んだことをぼやいた。あそこは人間の住むところじゃない、金をもらってもいやだ——そのころは神泉に公団の男子独身寮があった。二十代はもとより、四、五十代の中年、六十代の老年もいて荒涼とした未来を暗示していた。隣室は毎晩独り言をしゃべり、反対のほうは年中マスクをした胡散臭い中年である。村中は案外その住居が似合っていると高山は思っていた。だがそんなことはなかったのだ。ようやく抜け出したのでよかった。半月後の十月初旬には身内だけの会食をして渋谷のマンションに住むという。

二、三日して高山が新しい住居を訪ねてお祝いを渡した。花嫁道具が大方運ばれ、妻になる涼子を紹介してくれた。村中の言った通りの容姿や雰囲気だ。印象がたいそうよかった。渋谷駅まで村中と歩きながら話し

た。彼はいやに落ち着いていて浮ついたところは少しもない。駅前で別れぎわに、

「奥さんになる女は新鮮でいいね」高山がからかった。

「そう言ってもらうと、嬉しいね」

「よかったじゃないか」

「でも、あちらのほうが死火山だから、勘弁してもらえないね」

「死火山だって」

「うん、死火山なんだ」

「何、噴火しないのかね」

「死火山というのは、そういうものだ」

駅前にきてさようなを言つて別れた。煮えきらない気持ちになつたが、それ以上は何も言えそうもない。夫は三十九なら妻は三十六で男盛り、女盛りである。

しかし新婚からこんなこととてあり得るのか。ある程度予想はしたものの、本人の口から聞くと他人事ながら割り切れなかつた。一体どうなるのだろう、よく分からないままに電車に乗つて帰路についた。

一カ月したころ、村中が電話をよこし、沢木からよろしく言つていたと伝えた。最近会つていないのでたまには連絡を取つてもいい。マラソンのことを思い出して別に意味もなく聞いた。

「走っているかい」

「ああ、走っている。私から走りを取つたら、何も残らないからね」

「涼子さんがいるじゃないか」

「まあね。でも家内は私が走つてばかりいるから、いい顔をしないね」

「いい顔をしないのは、別の理由だろう」

「どういう意味だ」

「分かつているくせに」

「余計なお節介だ」

「一言くらい言わせてくれよ」

「私は何も話したくない」

村中は荒い声を放つて電話を切つてしまった。受話器をおいてから一言といつても何を話すべきか、考えていない自分に気がついた。抜本的な解決策はまったく見当たらないのだから、黙つていけばよかつた。当分はかけないことにした。向こうもかけてこなくなつた。月日が経ち、その間、沢木の細君が乳癌で死亡したという報せが入つた。遅れて見舞いにいき、お悔みの言葉を述べた。沢木は沈み込んでゐるわけでもなかつたので安心して戻つてきた。

村中たちが結婚して一年二カ月が過ぎた。お互いに

連絡を取り合わないのでしょうか皆自分から  
ない。男の役割を果たせないなら権威さえ失ってしま  
かねない。しかし高山は友人にゲスな好奇心を持つて  
はならないと極力抑えた。それとは別に他の話が出た  
かったので土曜日の夜、村中宅に電話をしたら本人は  
留守で細君が出た。ありきたりのやりとりをしたのだ  
が案外くだけた女性だった。

「村中君はどうですか」

「あいかわらずです。夫は今四国の大会に出かけてい  
ます」

「ほう、熱心ですね」

「熱心はいいですけど、妻を顧みないですよ。こんな  
の夫婦とは言えません」

涼子が本音をずばり吐いたのでハツとした。

「僕も心配していました」

「高山さんも、ご存じなのよねえ」

「そりや少しはね」

「困りましたよ」

「治療のことは、考えていますか」

「病院にいつて、医師に相談してはどうかと、勧める  
のですが、なかなか腰を上げません。薬があれば処方  
してほしいですよ」

そんな薬があるとは思えない。病院だって専門医で  
ないと困るだろう。どこか紹介してくれるかもしれな  
い。

「こんなこと、誰にも話したことないですよ。高山さ  
んに打ち明けただけでも、気が楽になりました」

「僕は彼と旧知の間柄だから、少しは奴に役に立つか  
もしれません」

「村中は、前からそうでしたか」

「女遊びは一切、しませんでした」

「初婚のときも、そうでしたか」

「あのときは、気が合わなくて、セックスどころじゃ  
なかったようです」

「何故、私と結婚したのかしらん」

「寂しいからでしょう」

「そんなの、自己中です」

「ええ、そうですよ」

いくら寂しくても結婚すべきではなかったろう。妻  
になる女性が気の毒である。特に涼子の場合、二度目  
だから簡単に離婚するわけにはいかない。もつともセ  
ックス以外は申し分なかった。

「近いうちに、沢木さんとも会うから、相談してみま  
す」高山は言った。



「でも、話が広がるのは嫌ですよ」

「大丈夫です。彼は十分に信頼できる男だから」

「ええ、私も信頼はしています」

不能の話がこんなにおおっぴらになるとは考えもしなかった。涼子はそれでも夫を認めているし、愛情が冷めているわけではない。

一週間後、駒込の沢木の家に出かけた。高山にはある考えがあった。あれしかない。何とかして納得させたかった。彼は親譲りの二階建ての家に住んでいる。父は亡くなって、母は娘の家に同居して孫の面倒を見ている。子供は二人とも高校生で、その日は出かけていた。二階の彼の自室にはすでにコップや氷や、おつまみや焼酎の瓶がテーブルに置かれていた。沢木は客を椅子にすわらせると、

「さあ、飲もう」

自分もすわった。酎ハイをつくと乾杯して飲み始めた。

「こいつが一番うまいよ」高山は大げさでなく言った。

「本当だ、たまらんね」

二人ともグイグイ飲んだ。実際、彼らは酎ハイが大好きだった。この世の最上の酒だと思っている。ほどほどに酔ってきたので、高山は村中たちがセックススレ

スだという話を持ち出した。それを電話で奥さんから聞いたと言った。

「EDか。どの程度なの」沢木はグラスを置いた。

「ほぼ完全インポだろうな」

「じゃあ、全然夜のいとなみはないのか」

「そういうことだ」

「私にも責任があるな」

「むろん、あるね」

「奥さんは、俺のこと、何か言っていたかい」

「その方面のこと、確かめてほしかったとね」

「そこまではできないよ」

「まあ、そうだな。何か考えはないかね」

「私には、名案はない」

沢木はかなりうろたえている様子だった。離婚は絶対にしたくないと言うし、何とか解決策を考えないといけないと高山は虚実とり混ぜて沢木に迫った。

「沢木さんが責任を取るしかない」

「そう言われても、私には何もできないよ」

「涼子さんと話していたら、あなたのことを褒めていたね。タイプだとひよいと漏らしたくらいだ」

「へえ、そんなことを言ったのかね」

「悪い気はしないだろう」

「うん、妻に死なれて、私だって、寂しいからね」

「沢木さんは、あちらのほうは健在だろうな」

「もちろんさ。ちゃんとできる」

「どうだい、涼子さんを誘ってみたら」

「実行に移すのはいかん。話だけだよ」

「一緒にお茶を飲むくらいなら、いいだろう」

「村中さんにすまない」

「慎重にやれば、見つかりはしない」

「エスカレートしたらどうする」

「自然の流れにまかせれば、いいじゃないか。男と女の仲だ、何があってもおかしくない。そうだろう」

「まあね」

「沢木さんも、ものの道理がわからない男じゃない」

高山の口調には勢いが出てきた。彼には村中への怒りがあった。こと女に関しては勝手に振る舞って女達と知り合うとよく妨害した。「この男はセックスをするだけで、後は知らぬふりをして、逃げてしまおう」とか、「口先だけうまくて誠意がない」とか、中傷誹謗してマイナス・イメージを植えつけて村中に有利に展開するように仕向けた。こんな間尺に合わないことはない。そのたびにこのヤローと齒噛みして悔しがった。仕返しをするわけではないが面白くない気持ちは残っている。

る。ともかく何としてでも沢木の心を動かしたかった。「沢木さんを応援するよ。涼子さんを口説いてみないか」

「そこまで言うなら、考えるよ」

「よく考えてよ。彼女の心底には不倫願望が渦巻いているからね。誰かが受け止めてあげなきゃいけないよ。俺にはそれがよくわかった」

高山は何の根拠もないのに言い張り、大車輪になっていた。

「彼女は、本当に私を好きなのかね」沢木が念を押した。高山はそれははっきりしていると答えた。

「胸がキューンとしてきたよ」

「それは恋をしている証拠だ。村中の留守のとき、ま

ず、電話をしてみるといいね」

「ああ、やってみるよ」

「飛び上がって喜ぶだろう」

「そんなことを言われると、ゾクゾクしてくるよ」それから高山は自説を述べた。今の世の中はセックスレスの時代だから既婚の中年女は夫以外の男に抱かれたがっている。遠慮はいらないからどんどん口説いたほうがいい。モラルなんか糞食らえだ、我々は時代に乗り遅れにならないようにもっと先進的にならなけ

ればいけない――

「賛成、その通りだ」沢木は頷いた。「今日は、君からいい話を聞いた。猪突盲進するよ」

「俺もひとふんばりするから」

高山はそうは言うものの、彼女のいない自分を寂しく思った。熟女の好きな彼は夫のいる、いないに関係なく生活の匂いのする中年女と寝てみたいと思っている。毎晩のように贅肉のついた太めの女を妄想するのだが、このところずっと不作だった。その夜は沢木を洗脳したような気分になっていとまを告げた。

三カ月ほど過ぎたころだったか、沢木から電話がかかってきた。受話器を耳に当てると、

「とうとう、涼子さんを陥落させたぞ」

勝ち誇ったような声が響いた。高山はそうか、そうかと言いながら今となっては疎ましかった。正直、何も聞きたくないのだが沢木はべらべら勝手にしゃべった。

「こんな素晴らしいストーリーを、考えてくれた高山さんに、感謝しているよ」

「感謝はいいよ」

「だって、いい体をしているんだぜ」

高山はだんだんと腹が立ってきた。

「そんな、自己満足的な話は、控えてくれよ」

声が冷たかった。

「高山さん、前と違うね。どうかしたのかい」

「どうもしないよ」

「いやにケンがあるな」

少しの間、沈黙した。高山の頭の中は苛立ちが渦巻いていてつい喧嘩腰になった。

「なんで、君一人がいい思いをするんだ」

「いい思いも何も……」沢木は不可解そうな口調になった。

「俺は、イヤになったんだ」

「どうイヤになったの」

「俺には、妻も恋人もいないからさ」

「なんで、そんなことを言い出すんだ」

「気が立っているんだよ」

「高山さんもセクシーな女を見つけるんだよ」

「簡単に言うなよ」

「それしかないだろう」

そんな話をしながら、涼子を奪われたような気分になつてきた。考えたらあんないい女はいない、沢木に自由にされるのが癪に障ってきた。彼もマラソンをやっているから肉の引き締まった体つきをしている。脚

は長くスマートだ、顔も悪くない――

《ちくしょう、いい気なもんだ》

それ以来、自分から電話をかける気がしなくなった。向こうからきたら受話器を取らないでおいた。携帯も無視した。沢木は遠のいていった。二人の間は疎遠になってしまった。

二年くらい経った。王子駅の近くで坂井勇二に行き合った。酒焼けした醜い顔に愛想笑いを浮かべて近寄ってきた。情報を知りたいのでゆるやかに話しかけた。村中は他区の図書館に移ったのでどうしているかは知らない。小川佐代子は郷里の図書館に勤めていて独身らしい。坂井は豊田と連絡を取っているようだった。「豊田さんの情報だと、小川さんは恋愛もしていないそうだ」

「そうなんだ」

高山が急に笑みを浮かべた。気色悪い、いやらしい笑顔だ。坂井が何故そんな顔をするのだと聞いた。

「あの女が処女のままというのが、いいね」

「そうかなあ」

「多分、セックスしないで死んでいくだろう」

「それがいいかね」

「ああ、楽しいよ」

そんな立話をして別れた。それから長い年月が過ぎた。六十四歳になる高山はその間、再婚も同棲もしなかった。風俗の女は嫌いだから欲望を充たすこともなかった。体も丈夫で大して問題はなかった。ただ、わずかに心筋梗塞の症状があるぐらいで、心配するほどではない。楽しみは何もないが、一年に一度くらい坂井に電話をして、情報を得るくらいだった。

村中にも連絡をして手紙なり電話なりを交わしたいがなかなかできなかった。涼子とはどうなっているのか確かめなければ落ち着かなかった。大晦日に勇気を出してかけた。村中のしわがれた声を聞いたときは、心持ちビクビクした。名前を名乗ると嫌がりもしないで応じてくれた。

「小川さんはまだ一人らしいね」

「それが、どうしたんだ」

「どうもしないけどね」

「私も一人だ。いけないかね」

「そうだったのか。別れたのかね」

高山はまた訳もなく胸がときめいた。自分に矢のようなものが突き刺さって来るような気がした。

「ああ、涼子とは別れたよ」村中は何でもないことの

ように答えた。「却って、すつきりした」

「村中くんのさわやかな声を聞いて、ほっとしたよ」

「一つ、報告しておくよ。涼子は沢木と正式に結ばれた。幸せそうだから、これでいいと思つてね」

「幸せならいいよね」

「私は言うことはない」

「それだったら、俺も話すよ。実は俺が二人を引き合  
わせたんだ」

「えッ、高山くんが……」

村中が少し驚いた声を出した。

「そうだよ」

「ふーん」

「うまく、収まったわけだね」

「正月は、どこかに出かけるのかい」村中が聞いた。

「寝正月だよ」

翌日の元旦の午後七時ころ、村中が訪ねてきた。家  
の中に招じ入れてから、お茶を入れようとした。天候  
の話をしていたら村中が急に興奮して口論になった。

三十分近く言い合つて高山は襟首をつかまれた。胸に  
キリキリ痛みが走った。心筋梗塞の症状だろう。薬を  
飲むとたいてい治るのだが、そういうわけにはいかな  
い。振りほどこうとすると壁に頭をいきなりゴツンと

ぶつけられた。目眩<sup>めまい</sup>がしてしゃがみこんだ。失神して  
数分して目を覚ましたら村中はすでにいない。薬を飲  
んでから着替えをしてベッドに横になった。小川佐代  
子や村中のことを考え、当然の成り行きだと安堵した。  
そのうちに朦朧として意識が無くなった。八日後、高  
山は遺体で発見された。新聞がたまつており、孤独死  
として扱われた。

(きさか・こういち)